



減びから学ぶ税の意義

大田区立大森第六中学校 三年 小林 律仁

ある日、私の帝国は滅びた。西はブリテン、東はオリエントまで勢力を広げ隆盛を誇っていたはずの私の国は、あっけなく崩れ去ったのだ。私の帝国はたった一つの、しかし重大なミスによって民心を失い瓦解した。そのミスとは何か。それは税との向き合い方だ。

とはいえ、もちろん現実の話ではない。私が熱中している歴史シミュレーションゲームでの出来事だ。このゲームでは、プレイヤーが中世から近代の国家を率い、内政や軍事、外交を操って国を発展させていく。私の初めての統治は、華やかだった。税金で豪華な宮殿を建て、軍を拡大し国を大きくすることに夢中となり、国民への還元など考えもしなかった。しかし十七世紀に入ると、機運が変わった。時代は絶対王政から市民社会へと大きく揺れ動き、民衆は権利を求め始めた。革命の時代が到来したのである。それでも私は、税の使い道を変えなかった。その結果、農民は反乱を起こし、商人は港を封鎖し、兵は離反した。そのとき、私は初めて気づいた。税とは、王の権威を示す手段ではなく、国家と国民の支え合いであり信頼の証なのだ。

この失敗をきっかけに、私はふと、現代の日本では税がどのように使わ

れているかを考えた。調べてみると、国民の健康や生活を守る社会保障費、道路や上下水道を整備する公共事業費、教育や科学技術発展のための文教・科学振興費など、すべて人々の暮らしに直結した使い道であることが分かった。私が当たり前に使っている学校の教科書やボール、毎日通る道路や信号、緊急時に駆けつけてくれる警察や消防、救急隊。これらもすべて、税金によって支えられている。政府は、国民の信頼に応えているのだと感じた。もし政府が私のような権力に溺れた愚王であつたなら、この「当たり前」の日常は、きっと存在しなかっただろう。税は個人の力では成し得ないことを可能にする、「見えない大きな力」でもある。ダムを建設したり、老朽化した橋をかけ直したりすることは、個人では到底できない。だが、国民一人一人の小さな力が集まり、それを政府が大きな力として国民に還元している。つまり、それを託す納税者の人々の信頼と期待によって成立しているのであり、「日本をもっと良くなってほしい」という人々の想いの結晶なのだ。私はまだ直接税を納めていない。けれども、すでに税の恩恵を受けて生きている。それは、未来の日本を思う人々のまなざしの延長線上に、私がいるということだ。その期待にこたえるために、私はもっと多くのことを学び、周囲への感謝を忘れずに生きていきたいと思う。かつてゲームの中で無知な王であつた私が、いつか確信を持って現実の市民として社会の一隅を担う一人となるように。

ゲーム画面を閉じて手にした教科書が、以前よりもほんの少しだけ重くなったような、そんな気がした。